

政治と教会

ドイツ国民議會でのベネディクト十六世の演説

「聞くところ」 ― 立法に関する黙想 ―

民主的な手順を経て、国民の代表として選ばれた皆様、ドイツ連邦共和国の善のために働かれている皆様の前で、お話し出来る事、私の生まれ故郷であるドイツの有名な議會にお招きいただいた事は光栄かつ喜びであります。私は、国民議會の議長に、私をお招き下さった事、また温かな歓迎の言葉に対し、お礼を申し上げたいと思います。私自身は、偉大なる皆様、単にその出身から来る良心に基づいた興味からだけでなく、生まれ故郷であるドイツの事象に関し多大なる関心を払っています。しかしながら、今回私は、教皇として、ローマ司教として、カトリックの最も高い責任ある立場にある者

として講演をなすべくお招きをいただきました。このご招待は、聖座が人々と国家の間での果たす役割についてのご理解に基づいてなされたものと理解します。私が国際社会において有するこの責任を一旦脇において、自由国家の法に関する考察をご提示申し上げたいと思います。

まず、聖書の簡単なお話から、法の基礎についての黙想からお話を始める事をお許し下さい。列王記の最初の本において、主が若きソロモン王を招いた事が物語られています。主はソロモン王が王座に就くにあたって、何か望みはないかと尋ねます。成功？富？長命？敵の殲滅？ソロモン王はそれらをひとつとして望みませんでした。そのかわりに、彼は聞くところを望みました。

それがあれば神の民を統治し、善と悪とを見分ける事ができる、と考えたのです（列王記一 三章九節）

この物語を通じて、聖書は、政治家に取つての至上の課題がなんであるかを告げたいかのようです。政治家としての仕事の基本的な判断基準と動機は、決して成功でも、また物的な見返りでもない、ということでした。

政治は正義を旨指して励まなければならず、また平和の基本的な前提となる法律制度等を設けなければならない、ということでした。政治家が成功を求めるのは自然な事です。それがなければ、実際に効果的な政治的行動を為す事ができないわけですから。それでも成功は正義という基準、良い事をなすという意思、何が正しいかという理解に対して従属的であるということでした。成功は、魅力的です、それゆえに、何が正しいか、という事を偽る道に、正義を破壊する道を開く余地があります。

「正義が無ければいかなる国家でも盗賊の集まりと何が違うのか」とかつて聖アウグスチヌスは述べました。

もし権力が正義から離れた時、正義を否定し破壊した時、国家が破壊する道具となる事、非常に高いレベルで組織された、盗賊の一団となり、全世界を恐怖のどん底に投げ入れ、深淵に追いやるかについて、私達ドイツ人は、私達自身の経験によって、この言葉が空しい亡霊といったものでないことを知っています。正しい事に仕え、悪の主権と戦うことは依然として政治家の基本的な使命であります。

いまだかつて手にした事の無い力を、人類が手にした歴史のこの瞬間に於いて、政治家のこの基本的な命題は著しい責任を負っています。人は世界を破壊出来ます。人は自分自身を操作出来ます。人は、いわゆる、ヒトを作り出し、その人間性を否定出来ます。私達はどうか善を見極めればよいのでしょうか。悪と善をどう分けることが出来るのでしょうか。本物の善とみせかけの善をどう見抜けばよいのでしょうか。今日においても、

ソロモン王の願いは、政治と政治家にとつて、疑う余地のない明白な緊急の問題であると言えるでしょう。

法によつて整えられる事の必要な大部分は、多数決の原理によつて支える事が出来ます。しかしながら、法の基礎、根本の問題として、人間の尊厳と人間性が危険にさらされている場合、それでは十分でないのは明らかです。責任ある地位にある者は全て一人一人が、法を定める際、従うべき基準を探し求めなければなりません。三世紀において、オリゲネスという偉大な教義学者はある法的なシステムに抵抗するキリスト教徒に対する説明として以下のように述べました。「神法に反する法を持つ、スキタイ人の間で暮らす事を強要された、と想像してほしい。真の法が危機に瀕しているなら、たとえそれがスキタイ人の法に反する事であつたとしても、自分たちが正しいと信ずる行動を集団として共にするのは当然であらう」

この信念は、ナチ体制や他の全体主義に対する抵抗運動を動機づけました。その活動は正義と人間性に対し、大いなる貢献をなしたのです。彼らにとつて、強制された法は無法なものであることは明らかでした。しかし民主的な制度の下における政治家の決断においては、真の法とは何か、何が実際に正しく実行すべきなのか、という問いは明白であるとは言えません。

人類学に内在する問題として、何が正しく何を強制力を持った法と為すべきかについては、自明であるとは言えません。正義に仕える法律の枠組みを検討する際、何を以て正しいかをどのように判別するかという答えが簡単であつた事はありません。今日、膨大に拡張した情報量と私達の受け入れ能力を考えるなら、なおのことです。

私達は何が正しいのかと、どうやつて判別すれば良いのでしょうか。歴史において、法のシステムは宗教を基と

してきました。人の間で何が法に適うかは、神性を参照して決められていました。他の大宗教と違い、キリスト教は国家と社会に啓示的な法を提案する事はありませんでした。法的な秩序は啓示から派生しなかったということですが、代わって、自然と理性を眞の法の源泉であると指摘したのです。主体と客体としての理性の調和、その領域は共に創造主である主の理性を、自然に前提としたものだったのです。

キリスト教の教義学者は紀元前二世紀に形成が始まった哲学的法学的活動に自らを適合させました。即ち、その世紀前半にはストイック(禁欲的)な法学者により発達してきた社会的自然法はローマ法の指導的な立場にいる教師達と出会いました。この邂逅を通して、西側の法的文化は生まれたのです。

これは人類にとつて過去も現在も重要な、法的文化を解明する鍵となります。このキリスト教以前の法と哲学の結婚はキリスト教中世期、啓蒙主義時代の法的

発達、人權宣言、一九四九年ドイツ基本法、「全ての人間共同体の、世界の平和と正義の基礎として、侵すことができず、奪う事の出来ない人間の権利」に道をひらいたのです。

法と人間性の発達に於いて、キリスト教の教義学者たちが多神教に伴った宗教法に反りを合わせた事、また哲学の側面として、理性と自然の関係を法の普遍的な源泉として認めていた事は特に重要な事柄です。聖パウロが既にこの段階を踏んでいた事を、ローマの信徒の手紙に読む事ができます。

「異教徒がイスラエルのトーラーの律法を持たない時、法の求めるところを自然によつてなした。彼ら自身が彼らの法であった。法が求めるべきところを彼らのところにすでに書かれているのを示す、即ち彼らの良心が証をなしたのである」(ローマの信徒への手紙 2 章 14 節)

私達はここに理性と良心という二つの根源的な概念を見出します。良心とは、ソロモン王の「聞くところ」に

他なりませんし、理性は存在するものが発する言語に對して開かれたものです。

これが啓蒙、第二次世界大戦後の人権宣言、ドイツ基本法の枠組みまで時代の立法の基礎の明瞭な説明を提供するとするならば、この五十年の間に状況の劇的な変化があつたと言えます。今日自然法という考え方は、カトリックの教義独特のモノと看做されています。非カトリック環境の議論には含まれるに値しないとみられているようで、結果的に、その用語を口にする事が殆ど恥ずかしいと感ぜられている様子です。この状況がいかん生じたか簡単に素描してみましよう。

これは根源的に言つて、「である」と「であるべき」との間に橋を掛ける事の出来ない深い切れ目があるという考え方から来ています。「べきである」は「である」から生じることはあり得ない、なぜなら二つは異なる面に存在しているから、という考え方です。

これは殆どの人達に実証主義の自然に関する考え方が受け入れられていることによります。ハンス・ケルセン

の言葉を借りるなら、「自然とは、原因と結果によりつながつている、客体的データの総和である」即ち倫理的な示唆はそこからは全く得られないという考え方です。

実証主義者の自然に関する理解は、自然科学が説明する様に自然を純機能的に捉えていますから、倫理と法の間になら橋渡しを提供し得ません。単に機能的な答えのみを齎(もたら)します。同様の事が理性についても言えます。実証主義者の理性に関する多くの理解はただただ、純粹に科学的なそれです。この理解に基づくなら、立証できないもの確認できないものは、どんなものでも厳密に考えれば、理性の扱う領域に属さないこととなります。ということは「倫理と宗教」はその主体的な領域に限定されねばならず、厳密な言葉の意味において、(倫理と宗教は)理性と無関係に存していることになるのです。

実証主義者の理性が支配し、他のものは全て除外されている領域では——これは一般の考え方にひろくあて

はまりますがー 倫理と法に関する伝統的な知識の源泉は除外されていきます。これは全ての人に影響を与えている劇的な状況であり、一般の議論を必要とするところですよ。まさに、この講話の基本的なゴールは、この議論の開始を提案するところにあるのです。

実証主義者の自然と理性に対する取り上げ方や、一般的な世界観は、人間の知識とその増進に最も重要な要素であり、それなしで済ますことは出来ないの一言を俟ちません。しかし、その実証主義者のアプローチの中身とそれ自体において、人間の実際の「呼吸」に全て対応するには十分な文化であるとは言えません。彼らが理性を、それで全てまかなえる文化であると考えてるところでは、他の文化の真実は全てサブカルチャーの状態として抹殺され、人間は消滅し、人間性を危機におおやります。

私はここでは特に欧州を念頭に置いて、実証主義のみを共通の文化、立法の共通の基盤であると一斉に強調

努力し、他の全ての識見と文化の価値をサブカルチャーのレベルにおとしめしていると申し上げております。

欧州と他の文化は結果的に文化の無い状況になり、同時に極端な過激主義とラディカルな活動がその間隙を埋める事になっています。彼らが自ら宣言した実証主義の排他的な理性は、単なる機能以上のものは認識し得ません。これは、神の大きな世界の明かりと空気を全く得られない、窓のないコンクリートの掩蔽壕に似ています。

私達は、この物質的な世界においても、主の創造物である素材、私達が自分たちの製品として作り直している素材に覆われて暮らしているという事実から、なんら逃れる余地がありません。窓は再び大きく開かれねばなりません。私達は広い世界をみなければなりません。空と地球を、これら全ての正しい用い方を改めて学ばねばなりません。

しかし、その広い世界への道を、より大きなイメージに向かう道を、どう見出せば良いのでしょうか。不合理な考えや行動に脱線する事無く、理性の本来の偉大さをどうしたら再発見出来るでしょうか。自然はどうすれば、本来の深みを、その要求を、その命令を再び主張できるでしょうか。

誤解や過度の一面的な論争が生じない事を希望しながら 私は最近の政治史の中で発達を遂げたことのひとつを思い起こしたいと思います。

千九百七十年以降出現したドイツ政治における環境運動、それは完全に窓を開けたとは言えないものの、現在もそうであるように、新鮮な空気を求める叫びでありました。

それは決して不合理に見えるからといって脇に押し付けたり無視して良いものではありません。若い人達は、自分達と自然の関係に何か間違ったところがある、と気がついたのです。自然素材を私達の意のままに形を

変え利用したりするといった問題だけではなく、地球にはそれ自体に尊厳があり、その指示に従わねばならないと気がついたのです。私がこれを述べる際に、特定の政党を後押しするといった考えは全く念頭にありません。

もし現実と私達との関わりが何か適当でないのであれば、われわれは全ての状況を真剣かつ慎重に顧みなければなりません。私達は自分たちの文化の根源を問い直すよう促されているのです。この点について少し長くなるのをお許し下さい。エコロジーの重要さはもはや議論するまでもありません。私達は自然の言語を聞かなければなりません。またそれに応じて答える必要があります。

しかしながら、ここで、現在も過去も無視されている事柄について特に注意を促したいと思います。即ち人にもエコロジーがある、という事についてです。人には人が尊敬すべき自然があり、それを意思を以て操る事はできません。人は自由に自らを単に作り出した存在では

ありません。人は自らを作り出しはしません。知性と意思はありますが、同時に、自然(の一部)であり、その自然を尊重し、聞き、自らがなにものであるか、自分が自らを作った存在でない事を受け入れた時、その意思ははじめて正しく機能します。その他の道はなく、この道により、真の人間の自由は満たされるのです。

再び、自然と理性の根源的なコンセプトという本講の出発点に戻りましょう。

法実証主義の偉大なる擁護者である、ケルセンはその84歳の年に、一九六二年のことですが、「である」と「であるべき」という二元論を放棄しました。(ちなみに84歳という年齢でも合理的な考えが出来るという事実にはホッといたします)彼はその前に、規範というのは意思からのみ来ると述べました。自然は、従って、そこに意思があるなら、規範のみを含む、と彼は付け加えています。しかし、彼の言葉は、自然に意思が入った、とする創造主である神を前提にしている、とは言えないでしょうか。「この信

仰の真実さを議論する事は全く無益な事だ」と彼は見えていました。しかし、それは本当に無駄でしょうか？

実在する理性それ自身が「創造する霊クレアトルス(Dritus = Creator Spiritus)」、創造的理性を前提としてはいないだろうかと私は自問する自分を見出します。問う事は、意味のないことでしょうか。

この時点に於いて、欧州の文化的遺産に応援に入ってもらうのが適切でしょう。創造主である神がいるという確信は、人権という考え、法の下の平等、一人ひとり全ての人に存する侵す事の出来ない尊厳、人の行為に伴う責任の気付きといった事柄の始まりとなるでしょう。私達の文化の記憶はこうした理性的な内省によって象(かたど)られています。これを過去の事として無視するあるいは見過ごす事は私達の文化を完膚なきまでにばらばらにし、完全に失わせるでしょう。

欧州の文化は、エルサレムとアテネとローマの邂逅(かいこ)から生じました。イスラエルの一神教、ギリシアの理性的な哲学、そしてローマ法です。この三方向の邂逅が欧州の内的なアイデンティティを確立しました。神の前における人間の責任、全ての個々の人の侵す事の出来ない尊厳の承認、それらが法の基準となります。この基準が今日、歴史のこの瞬間に私達が守るように召されているのです。

若きソロモン王は、主に招かれた際、その責任を果たす事が務めであることを確信していました。私達が今日、立法者として、務めを果たすことを求められたら、何を願うのでしょうか。私は、今日においてもなお、ただ、「聞くこころ」を望む事だけではないかと考えます。「聞くこころ」、即ち善と悪を見分ける能力、それゆえに真の法を制定でき正義と平和に仕えることが出来るのです。

ご清聴、感謝致します。

解説：

一九二七年九月二十二日に生まれ、一九三三年の国家社会主義体制の環境下で育ったドイツ人教皇は、立法の源泉に関して極めて深い黙想を与え(立法者らと)分かち合った。演説をした時点での緊張は容易に想像できる。即ちドイツ人が自らの故国の議会で、財政



ドイツ国民議会でスピーチをする教皇（中央白衣）

的・文化政治的の深い危機を経験している最中、欧州の中心的立場にある近代ドイツの立法を担う責任者達を前にして、一人のキリスト教徒としての講話に注目が集まつたことである。ベネディクト16世はこの機会を捉え、その教皇在任中において、立法の源泉とは何かについて最も深い黙想を、集まる立法者達に行つた。講話はあまりにドラマティックであり、また深いものであつて、同時に殆ど知られていないので、二〇一一年の出来事を顧みて、講話をここに全て掲載し、簡単な解説を付するべきとの結論に至つた。解説の一番目として、彼はこの機会を「教えの時」として活用したことである。彼はドイツの政治家達を前にして議會に立つ始めての教皇となつた。同時に教皇は立法の源泉がどこにみいださるか、あるいはみいだすべきかについての正直で深い授業をなしたのである。ベネディクト16世はこの九月において、ドイツの國民議會を前にして教師であつた。国を代表する人達の教師、祖国の教師であつた。

二番目は、一番目と関連がある。ベネディクト16世は世俗の聴衆に対して講話を行つた。彼は招待を受けた立場であつた。

彼はローマのサンピエトロ広場で信徒である聴衆に向かつて、あるいは世界のどこかの司教座で語りかけたのではなく、ドイツの議會で語つたのである。彼は、聴衆の持つ信仰、あるいはローマ司教としての、ペトロの後継者、キリストの代理者としての權威を前提としない教え方を探らねばならなかつた。つづめて言えば、彼はキリストの代理者として、實際そうであるのだが、その立場を意識させずに、キリストの代理者にならなければいけなかつた。彼は聴衆のいる場所に達する道を見出さなければならなかつたのである。

そして彼はそれを成し遂げた。彼はそれを聖書や啓示を引用するのではなく、理性に依存する方法でなした。ベネディクト16世のドイツ國民議會での講話は、ボストクリスチヤンの世界に生きる私達にとって、他の大きな説教とともに、先例として覚えられなければならない

い。非キリスト者に、不可知論者に、無神論者に、かつてクリスチャンであったが今は離れた人達に新しい福音宣教が届くために模索している人達に取って、これはひとつのモデルである。これは学ばねばならない、習わなければならぬ。

だからここに「二〇一一年のベスト講話」のタイトルを付与したのである。

教皇の考えのエッセンスには、西側、概して言うなら世界全体は、信仰と人類史的な前提となる深いキリスト教文化との接触を失ってしまい、単に与えられたものになってしまった、という点にある。国がいかなる法を持つべきかを見出すには、どんな法が正しく善く、どんな法が不正で悪であるか、といった別の種類の議論が必要である。

教皇は、最近「信仰年」宣言された際に「広く受け入れられた信仰と鼓舞された価値から、過去において、統一された文化の相関関係を認識する事が可能であったが、今日において社会をとりまく環境はそれとは異なる

っている。深い信仰の危機が多くの人に影響を及ぼしているからである」と述べられた。

ベネディクト16世は実際何を言ったのだろうか、彼は、来るべき「信仰年」において、カトリック(信者)は深い文化宗教的結びつきを通じて、その信仰を新たにしなければならぬ、信仰を他と分かち合うために、自ら信仰に対する理解を深めなければならない、同時にそれは実際の教会の教えだけではなく、好例となるキリスト者の愛徳の業を通じて新たにせよ、と述べたのである。

これがベルリンの議会で行った記念すべき講話であった。彼はソロモン王のモデル、「聞くころ」のモデルを立法者達に示し、それによって、彼らが長く切望していた聖なるもの、超越的なもの、プラトニックな意味での善、ついにはキリストその人とその花嫁である教会に導く初めての味わいを与えたのである。

二〇一一年九月二十二日木曜日 於ベルリン・ライヒスタックビル、